



小林近未来ハイスクール 2021.12.11

小林市キャリア教育支援センター主催で「小林近未来ハイスクール」がありました。

中学生や高校生、社会人がグループになり、「働くこと」「将来のこと」「生きること」などについてワークショップ形式で自分の将来像を話し合い、ライフスタイル、ワークライフプランについて考えました。

各校人数制限がある中で、本校からは4名の生徒が参加しました。他校の生徒や高校生と直接話しをすることで、今までの考えを修正したり拡大したりする機会になったようです。



リコーダー講習会 2021.12.14

東京リコーダー協会からプロの演奏家、増永奏氏にお越しいただき、リコーダー演奏会を実施しました。2年生と3年生に1時間ずつ講習をしていただきました。

鑑賞教室などでいろいろな演奏を観てきましたが、リコーダーの演奏はあまりなかったように思います。今回講習会を参観させていただき、プロの技に魅了されました。生徒の目の輝きや演奏に夢中になる様子、自然にでてくる手拍子や感嘆の声…プロの生の演奏がこれだけ心を揺さぶるものかと改めて勉強になりました。



細野小学校6年生の中学校体験活動 2021.12.13/14

本校では、中一ギャップの解消へつなげる取組として、小学6年生が中学校での学習や生活、部活動を体験する活動を2日間実施しています。

今年は2学年上の先輩方と「哲学対話」を実施しました。入学後は1年生と3年生になる学年です。

シェル・シルヴァスタイン作「大きな木」を朗読後に自分なりの問いを見つけ、グループごとに哲学対話を行いました。自分の考えをことばにすることは難しくても勇気のある作業ですが、しっかりできている6年生もいて感心しました。来年4月の入学式を楽しみに待ちたいと思います。



※ 1月9日(日)は参観日「自分で作るおにぎりの日」です。ご協力をお願いします。(裏面)

子の成長は失敗を見守る親したい

「すごい弁当力！」佐藤剛史

香川県で、「弁当の日」を始めた竹下和男先生は言う。

「子どもは失敗をする権利があると思っています。成長につながる失敗の機会を持たせることは大人の責任です。最初から高い完成度を要求したり、手際の悪さを指摘したり、シビアな評価を下したり、友達の弁当と比較をすると、弁当づくりの意欲は減退してしまいます」

僕の目玉焼き

(九州大学教員 比良松道一)

2回目の弁当の日のこと。「おにぎりと目玉焼き」弁当を持ってきた子がいた。

その日、私は子どもたちとご家庭に、「自作おにぎり、自分で作れるおかずを一品以上」作ってくるように、と伝えていた。

小学校2年生のH君の弁当は、ラップにくるまれた2つのおにぎりの横に、長方形の弁当箱が置かれている。その弁当箱の底のほとんどが、薄黄色の黄身とその5倍くらいの面積のある白身で占められていた。目玉焼きの他には、銀紙の小さなカップに数本のゆで枝豆。隙間だらけの弁当箱だ。

弁当箱の横に添えられた弁当カードに「めだまやきをつくった。たのしかったです」と感想が書かれていた。私はH君に尋ねた。

「目玉焼き、一人で作ったんやねえ。ひょっとして初めて？」

H君はとても得意気に頷いた。

「そうかあ。きれいにできたねえ。すごい、すごい」

おかずは目玉焼きと決めたH君は、朝、お母さんとお父さんが見守る前ではじめての目玉焼きづくりに挑戦した。油をひいて熱したフライパンの上で、生卵の殻を割り開いて中身を落とすと、黄身が壊れ、黄色の液体が卵白の中へと流れ出した。

失敗である。目玉にならない。呆然と立ちすくむ我が子を見てお母さんは言った。

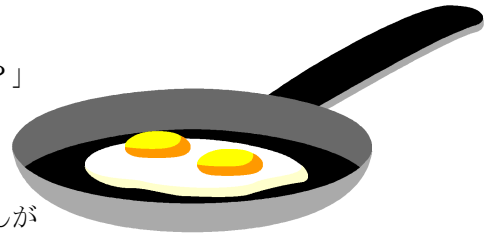
「大丈夫。それはお母さんの目玉焼き。だからもう1回挑戦したら」

2回目。今度は失敗しないようにと、1回目よりも慎重に挑んだ。だが、まともな失敗。

先ほどよりも落ち込んだ表情の我が子を見て、今度はお父さんが言った。

「大丈夫。それはお父さんの目玉焼き。だからもう1回挑戦できる」

かくして3回目。両親のアドバイスを受けながらフライパンの上に落とされた卵の黄身は、透明の卵白の中心に美しい球面を保っていた。三度目の正直。大成功だった。両親の拍手喝采を受けて、H君は満面に笑みを浮かべた。



(H君のお母さんの作文)

最初にお弁当の日が始まったとき、「出勤前の忙しい時間に…」という気持ちが私の中にありました。

1回目、おにぎりのみ。

2回目、おにぎりとお目玉焼きを作って行きました。

3回目、先生は「無理なくしておかずはお母さんでもいいよ」と言ってくれたそうですが、「自分で作る。おにぎりとお目玉焼きとウインナー」と答えたそうです。帰ってからは「明日、朝起こしてよ」と言っていました。確実に成長しているなあと感じることができました。

大人の私は、完璧なお弁当を「お弁当」と思ってしまいがちでしたが、自分で作ることや、一品ずつでも作るおかずが増えたりすることが大切なんだなあと思いました。